

Usefulness of Prominently Projected Aortic Arch on Chest Radiograph to Predict Severe Tortuosity of the Right Subclavian or Brachiocephalic Artery in Patients Aged >44 Years Undergoing Coronary Angiography With a Right Radial Artery Approach

メタデータ	言語: English 出版者: 公開日: 2014-03-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西崎, 祐史 メールアドレス: 所属:
URL	https://jair.repo.nii.ac.jp/records/2001601

授与機関名 順天堂大学

学位記番号 甲第 1538 号

Usefulness of Prominently Projected Aortic Arch on Chest Radiograph to Predict Severe Tortuosity of the Right Subclavian or Brachiocephalic Artery in Patients Aged >44 Years Undergoing Coronary Angiography With a Right Radial Artery Approach

(右橈骨動脈アプローチにて冠動脈造影検査を施行する 45 歳以上の患者における右鎖骨下動脈および腕頭動脈の高度蛇行予測のための胸部レントゲン上大動脈左第一弓突出所見の有用性)

西崎 祐史 (にしざき ゆうじ)

博士 (医学)

論文内容の要旨

右橈骨動脈アプローチによる冠動脈造影検査を施行する際に右鎖骨下動脈や腕頭動脈の高度蛇行はカテーテル手技を困難にする原因となる。予め高度蛇行が予測できれば初めから右橈骨動脈以外のアプローチを選択することが可能である。先行研究では、高齢、女性、高血圧、高 BMI (Body Mass Index) などが橈骨動脈アプローチで冠動脈造影検査を施行する患者において蛇行の予測因子であると報告されている。しかしながら、高齢者を対象にした研究はあまり知られていない。そこで私達は右橈骨動脈アプローチにより冠動脈造影検査を受けた高齢者を対象に右鎖骨下動脈および腕頭動脈の高度蛇行を予測する因子を検討した。右橈骨動脈アプローチにより冠動脈造影検査を受けた連続 847 名の患者を対象とし、右鎖骨下動脈や腕頭動脈に高度蛇行のある患者群と年齢と性別をマッチしたコントロール群を抽出し、高度蛇行に影響を与える因子を検討した。847 名の患者のうち 48 名 (5.7%) が高度蛇行を合併しており、その年齢の平均は 73.4 ± 8.6 歳 (±標準偏差)、女性が 29 名 (60.4%) であった。高度蛇行と関連の強い因子を検討した結果、高 BMI (オッズ比 1.17, $P=0.02$)、胸部レントゲン上大動脈左第一弓突出所見 (オッズ比 5.62, $P<0.01$)、血清クレアチニン低値 (オッズ比 0.05, $P<0.01$) が高度蛇行と強く関連している因子であることが分かった。右橈骨動脈アプローチによる冠動脈造影検査が予定されている高齢患者がこれらの臨床的要因を持つ場合には、右鎖骨下動脈または腕頭動脈に高度蛇行が存在する可能性があり、右橈骨動脈以外のアプローチの選択を検討するべきである。特に、胸部レントゲン上大動脈左第一弓突出所見と蛇行との関係は新しい発見であり、臨床的な意義が高いと考えられる。